

患者が望むチーム医療とコミュニケーション

認定 NPO 法人 ささえあい医療人権センターCOML
理事長 山口 育子

認定 NPO 法人 ささえあい医療人権センターCOML（以下、COML）は、患者の自立と主体的な医療参加を目指して 1990 年から活動してきました。日常の活動の柱は電話相談で、28 年間で全国から届いた患者・家族のなまの声は 59000 件を超えています。

活動の理念として、決して患者と医療者が対立するのではなく、協働する姿勢を大切にしてきました。「協働」という漢字の持つ意味は、「同じ目標に向かって歩む立場の異なる者が、それぞれの役割を担い合う」こと。慢性疾患を持つ患者が増えてきたということは、医療者の努力だけで治療効果の上がる時代ではなくなってきました。患者も自分はどのような努力をすればいいかを理解し、役割意識を持って積極的に医療参加する意識が必要です。そして、協働を実現するためには、医療者のサポートはもちろん、何よりも患者と医療者の良好なコミュニケーションが欠かせないと思っています。

ここ 20 数年間に患者を取り巻く医療環境は大きく変化し、患者の意識も変遷を遂げてきました。一時期、医療不信が高まった不幸な時代を経て、ようやく冷静に医療と向き合う素地が芽生えてきたようにも感じています。同時に、医療現場では患者対応の見直しがはかられ、どの職種においても患者に対して丁寧な説明をするようになりました。しかし、本来、患者の権利であったインフォームド・コンセントが、「説明すること」と解釈されて広まったことによって、医療者が必要と考える情報を一方的に提供するインフォームド・コンセントがほとんどになってしまっています。受けた説明を理解し、情報の共有化に至るインフォームド・コンセントのあり方が問われていると思います。

また、チーム医療の必要性が叫ばれ、最近では患者もチームの一員として位置づけられるようになりました。しかし、多くの患者は医師以外の医療者の専門性や何を期待できるのか理解できていません。まずは、それぞれの医療者が具体的に役割を伝えていくところからチーム医療の見直しが必要だと思っています。

情報が溢れる時代を迎え、インターネットの誤った

情報を鵜呑みにして翻弄している患者も増えてきました。あるいは、医療への過度な期待、根拠のない不信感、医療者から説明された情報を理解できていない患者も少なくありません。それらをクリアしたうえで、患者自身が自らの価値観でどうやって意思決定し、それを医療者と共有しながら治療を受けていくのか。更に医療者には、患者の安全が確保され、安心、納得できるような患者対応をお願いしたいと思います。

多くの患者・家族のなまの声をお聴きしてきた立場から、当日は患者が望む対応やチーム医療のあり方についてお伝えできればと思っています。